

『リザンドル』論

——作品の心理分析的構造について——

萩原茂久

典型的な *Nouvelle*

ルネ・ゴデンヌは、もちろん調べのついた範囲内のことであろうが、一六六一年から一六七〇年までのあいだに、表紙や扉に印刷された題名のなかに *Nouvelle* の語が見受けられる小説作品を十七冊数えている。⁽¹⁾ 一六六三年に発行されたヴィルディウ夫人の『リザンドル』(*Lisandre, nouvelle*) もその代表的な一つとなっているが、*Nouvelle galante, Nouvelle amoureuse, Nouvelle allégorique* のように *Nouvelle* に直接形容詞をつけたものもそこには含まれている。

すでに私は述べたことがあるが、⁽²⁾ 同世代者として十七

世紀のフランスに生を受け、文学史的に同じジャンルの小説制作に活躍したラ・ファイエット夫人(一六三四—九三)とヴィルディウ夫人(一六三一—八三)とは、文学生活においてもほとんど同時期にその第一歩を踏み出した。すなわち前者はその処女作『モンパンシエ公爵夫人』を一六六二年に発表し、後者は社会的な意味で処女作とみなすべき『アルシダミイ』を一六六一年に発表した。⁽³⁾ 『モンパンシエ公爵夫人』が世に出たつぎの年に、『リザンドル』がつづいて生まれ出たという事実には、両者を比較検討する私のような研究者にとっては、ある種の宿命的関連が感じられてならない。

しかし両作品は同じ *Nouvelle* のカテゴリーに属する

ことが明らかだとはいえず、重大な差異もそこには見いだされる。『モンバンシエ公爵夫人』には歴史が作品の枠組みとして不可欠のものとなっているのに反して、『リザンドル』にはそれが無いということである。前者が *Nouvelle historique* の術語であれ、また *Nouvelle historique et galante* の術語であれ、いずれの銘を打たれても少しも不自然ではないのに反して、後者は *Nouvelle galante* に属することは確かであっても、*Nouvelle historique* の領分には絶対にはまらない作品だといえることである。

『モンバンシエ』にも『リザンドル』にも作品のまえに序言の部分があり、前者では「出版人から読者へ」となっており、後者では「公女殿下へ」という献詞によって、当時グランド・マドモワゼルと呼ばれたモンバンシエ嬢（ルイ十三世の弟ガストン・ドルレアンの娘）に捧げられた作品であることが明らかとなっている。彼女は第二次フロンドの乱で若き日のコンデ大公（いとこ同志）と結び、マザランと国王の側に反抗して戦い、そのはなばなしい行動で歴史上有名となったが、マザラン＝国王側の勝利によって政治に手を触れることはもはや不

可能となった。失寵をこうむった者に残された道は文学への専心しかない。フロンドの乱でやはり国王に反抗したラ・ロシュフーコオが『箴言集』の完成や、ラ・ファイエット夫人の作品執筆への協力などを通じて、非政治的生活を形づくって行ったように、グランド・マドモワゼルもまた、気晴らしであると同時に生きがいでもある文学生活を、秘書兼相談役である文学者スグレの協力のもとに送ったのである。一六五〇年代後半から六〇年代前半にかけては、グランド・マドモワゼルがそのまわりに、当時でのかなり有力な文学サロンを形成していた時期だったといえる。

さて、『モンバンシエ』の「出版人から読者へ」のなかに、「作者は……（中略）……小説によく見かける名を（登場人物に）用いるよりは、わが歴史上で著名な名を借用する方が適当だと判断した……」⁽⁵⁾ という文章があり、これを『リザンドル』の「公女殿下へ」のなかにある、つぎの表現と比較することは興味ぶかい。

「このささやかな物語りは、女友たちのひとり自分が分に読ませようとして書いたものだが、殿下の気晴らしのために読んでいただくこうと思って献呈する、との趣旨

を述べたあとで) わたくしはこの物語りに登場する人物たちの、ほんとうの名はいっこうに存じません。……(中略)……わたくしの存じておりますのは、あなたさまに読んでいただく男主人公が、リザンドルの名で呼ばれているということだけでございます。(5)……」

「……友のことばを信じていただけますなら、ここに
あるものはすべて、純粹な想像によるものでしかござい
ません。どこでこの恋愛事件がリザンドルの身を起こっ
たのかさえ、わたくしは存じていないのです。……」(7)

つまり、『モンバンシエ』に登場する人物たちは、(ほとんどすべて) 歴史上に実在する人物であった——少なくともその名を借りたのに対して、『リザンドル』の登場人物はそうではなく、小説によくある人物名をつけられているということ。それからもう一つ、地理的背景も前者では実在のものが用いられているのに対し、後者では不特定の土地——「ある街」(複数)と表現されているにすぎないこと。

ところで、「リザンドル」そのものの名が、それまで小説作品として登場したことがあったであろうか? 一六一五年にヴィタル・ドディギエが『リザンドルとカリ

ストの悲喜劇的物語り』を書いた。(8) しかしこれは、クリ
アンドルの妻カリストに対するリザンドルの恋愛事件を
扱った短い小説で、ヴィルデイウ夫人の「リザンドル」
とは関連性をもたない人物であることがほぼ断定できる。

登場人物の名と「カギ小説」

世紀前半の牧歌的小説や英雄的小説に始まって、後半の古典劇に至るまで、フランスの十七世紀くらい文学作品がその題材を、神話的ギリシアを始めとして諸外国に求めたのは、世界にもそれほど例がないことだろう。パ
ピロニア、ベルシア、エジプト、ローマ、トルコ、アル
メニア、スペインなどにわたって材が拾われ、綴りも読
みかたもフランス語化した登場人物の名がはらんした。
『リザンドル』に登場するリザンドル、リジドール、
アルトニール、ドリーズ、クロリアース、リグダミスは
まさに小説的な名をもつ登場人物たちであり、これらの
人物がうごめく作品のかもしれない出ず雰囲気は、どうしても
「絵そらごと」「作りもの」の香りを濃厚に発散するの
はいなめない。しかし、ことはそれほど簡単ではないの
である。

当時のサロンに集まったひとたちが、直接の名や尊称でもって呼び合わず、仮りの名でもってたがいを示し合ったという現象が広く見られた。いわゆるプレシウ名であるが、サロンの創始者ランブイエ侯爵夫人はアルテニス⁽⁹⁾と呼ばれ、この現象の走りとなった。また、ランブイエの館の伝統を引きついでデュ・プレシリゲネゴのサロンでは、同夫人がアマルテ、夫がアルカンドル、ボンボンヌがクリダマン、セヴィニエ夫人がソフロニイ、ラ・ファイエット夫人がフェリシアヌと呼ばれた⁽¹⁰⁾。そこには現実のサロンを小説や劇の舞台に化するという魔術的作用がある。一種の仮面舞踏会が日常的に存在して、現実と小説との境界を消失させる。おのおのの人物は別世界の名で呼ばれることによってナルシスムを満足させ、別人格になるという錯覚にもとづく曖昧性と自由とを獲得する。プレシウ名はこのように、一人物を現実から小説へとみちびく通行証としての仮面を意味するが、小説の登場人物からプレシウ名その名を——つまり仮面をはぎとって現実の顔をあらわにさせるように働く、逆方向の力が当然の帰結として考えられてくる。いったん小説のなかにはいった人物を現実に戻すのである。

そのような意味において、現代の人間が実感としてもつような「絵そらごと」「作りもの」の印象を『リザンドル』のような作品にもつまえに、十七世紀のフランスの読者たちは、ちがった直感と興味を抱いたのではなからうか？ スグレやユエのような批評的能力も持った文学者たちが、Nouvelle や Roman の術語規定を中心に据えた小説概念の秩序化に努力していた一方では、読者たちは小説を読むたのしみの大きな中心の一つに、登場人物の仮面をはぐという快楽を置いていたのではなからうか？ 世紀前半の十巻以上にもほる大河小説を、読者がつぎつぎに読んで飽くことがなかったという事実を解明するのには、モデル当てるの興味を過小に見積もってはすべてがむなしものになると私は考える。だから「カギ小説」Roman à clef (モデル小説)の観点はもっともつと強調される必要がある⁽¹¹⁾。

作者のことばも、「カギ小説」のことを強く意識している。

「……わたくしがどれほど口を堅くいたしましたも、あなたさまがちよっとご命令になれば、(どの登場人物はだれがモデルだと)打ち明けられずにはいられないこ

とを他人はよく承知しているとみえて、その秘密を教え
てはもらえませんでした。⁽¹²⁾……」

この作者の言明は、「政治的な配慮」(名譽毀損的な波
紋を投じたくない)か、「興行的な配慮」(なおいっそう
読者の好奇心をあおる)か疑われる面もあるうが、私は
作者がその二年まえに発表した小説『アルシダミィ』が
疑いを入れない「カギ小説」であって、作者が異常に熱
した紛争のなかに投げこまれたという事実から考えても、
『リザンドル』にはむしろ政治的な配慮があったと信じ
たいのである。

旅と恋愛のバロック性

『リザンドル』は作品の自由なひろがりと変転とによ
って短い分量であるにもかかわらず、野放図な空間を包
んでいるのを感じさせるが、それは旅が小説の舞台とし
て設定されていることと深いかわりがある。——つ
まり上級クラスと思われる貴族のリザンドルは、おそら
く公務のためであろう、旅に出ている。そしてこの旅は
自由が大幅に認められたものであって、「仕事というよ
りはむしろ、好奇心にみちびかれて」、あるうるわしい

街にはいり、魅力を感じたので、そこにしばらく滞在す
ることを決めるような、そういう旅であった。

旅の自由さは恋愛の自由さを決定する。リザンドル自
身、作者のことは借れば、「恋のしかたから判断す
るに、それは文字どおりの宮廷男であって、誠実である
というよりは才知のある人間であり、情熱的になるとい
うよりは、恋愛を味わいたのしむタイプ」というべきで
あったのだから、旅という舞台背景はなおいっそう事件
をバロック的⁽¹⁶⁾なものにするのは当然である。リザンドル
がまずリジドールを見だし、つぎにはアルトニールに
移り、最後にドリズとクロリアヌに至るのは、「旅」
という背景を口実にしている以上不可能なことではない
にしろ、やはり作者の恣意と、そこから流れ出る事件の
偶然性のかさなりは否定できない。

とはいえ、それはあくまで外部構造の面からいえるこ
とばだということもまた真実である。十七世紀フランス
に(とくに後半に集中して)発達した *Novelle* という
小説概念が、スペインのピカレスク式小説と、話者の輪
番性によるひと区切りずつの物語りである『アカメロ
ン』や『エプタメロン』のような作品に影響されて成立

して行つたとの説は、一部の文学史家のあいだで定説となりつつあるが、その説を援用して『リザンドル』を、「リジドールとの恋愛」「アルトニールとの恋愛」「ドリーズとクロリアヌとの恋愛」という、おのおのの「小短篇」を並列的に集成した「短篇小説」と規定することも一見すれば不自然ではない。しかし、心理分析的に考察すれば、これらの各部分は内部構造的にかなりの緊密性をもつてつながっていることが了解されてくる。それらの点を中心にして内容を仔細に検討して行くはずである。

「リザンドル」と「リジドール」

リザンドルのリジドールとの出会いは偶然ではない。もともと「恋愛を味わいたのしむ」ことの好きな貴公子が、旅の途申外国の魅力的な街に足をとどめ、すばらしい恋愛対象を求めているいろいろ調査し、リジドールを知り、それに接近する。

ここで注意すべきことは、ヴィルディウ夫人の表現法（人物の肖像^{がらし}その他の）は、ラ・ファイエット夫人の抽象的・中性的なそれにくらべると、かなりに色彩が濃いということである。リザンドルについてはその資質や癖

や好みを具体的に書こうとするし、リジドールについても、欠点を表明することをばからない。ラ・ファイエット夫人が人物の肖像^{がらし}を描く場合は、最上級や絶対語——つまり贅辞的言語をふんだんに用い、人物の個性的差異は、それらの語が多いか少ないかによってかろうじて比較されうる程度のもが多かった。しかしヴィルディウ夫人の表現は、もっと人物の個性をはっきり浮き出させる。

「(彼女の存在を知ったという)この幸運は彼には大きなものと思われた。リジドールをこのうえなく気に入ったからだ。彼女は若いし、肌は白いし、髪はブロンドで、やさしい顔つきだった。それほどの才知はもっていないとの一般の非難はあったが、その欠点もリザンドルの心から彼女の姿を追い出してしまえなかった。反対に、頭のよすぎる女性にはかえって危険だった。⁽¹⁷⁾」
そして、女性魅力がありさえすればよく、恋についての美しい云いまわしができなくても、ただしかるべき場合にはつきりと、愛しています、といえさえすれば、二週間もすればなんとか自分を認めるようになるのだ、とリザンドルは考える。

白い肌と、ブロンドの髪の毛という特徴は、クレージュ夫人についても述べられている。「その肌の白さとブロンドの髪は、彼女以外にはかつて見られなかったほどの、輝くばかりのみずみずしさをそこに感じさせていた。顔の線はすべて整っており、その容貌とからだつきは優雅さと魅力とにあふれていた」⁽¹⁸⁾

この種の賛辞的表現は対象にいちじるしく高貴さの雰囲気を与えるが、しかし他の登場人物にも読者にも価値判断を拒絶する。ラファイエット夫人とはちがって、一時はモリエール劇団とも関係し、喜劇制作に希望を見いだそうとするヴィルディウ夫人は、彼女らしくモリエールの女性観をちらちらと見せずにはおかない。

しかし才気・才知にやや乏しく、頭がいい、とはいえない女性の方がかえってよいと思うリザンドルの心境は、一つの心理分析であり、一種の心の正当化である。(その証拠には、つぎに登場する才知の点では完全なアルトニールに対しては、心の留保なしに傾倒する) この心の正当化については、リザンドルが熱心に思いを相手に示したにもかかわらず、いっこうにリジドールの心が燃えてこないのを見る彼の内心を分析している個所にも表わ

れる。

「自分に不利益なことはたやすく信じこまない男だったので、なにか他の理由があるその冷やかさを、彼は女主人公の才知がないせいにした。この考えは、すっかり悲しみに沈もうとする彼を慰めてくれたが、……」⁽¹⁹⁾ こういう心の正当化も現実の力をもつことはできず、「あらゆる男のなかで最高に歎き悲しむ男」⁽²⁰⁾ であるかのように、歎いたのである。

こうして作者は、最上級をふんだんに用い始める。むしろ賛辞としてそれを用いるのではなく、わるい感情状態や、その「振り」をする——つまり仮面をつけるときに使用するのである。(賛辞の場合にそれを用いるのがひんぱんになるのは、ドリーズとクロリアヌについて肖像がしを示すときである) リザンドルがリジドールのそばにいとるとき、世にも誠実で、世にも情熱的な恋びとでなければいえないようなことばを口にし、それはほかの女性なら真底から感動するほどのものだった。しかし「才知にすぐれた」男なら、誠実さを装うくらい容易なことではないのだ。

「リザンドルとリジドール」の部分は、Espritに関する

る思考がそこにちりばめられ、またそれが小説展開のカギにもなっている。リジドールのリザンドルに対する冷淡さの理由が一挙に氷解する、長い、比較的絵画的な場面はその意味では象徴的なものを感じさせる。——ある大公女がこの街にはいる壮麗な行列の先きの方でふたりの騎士が争いを始めたが、その騎士のひとりを見たリジドールは馬車を捨てて走り寄った。リグダミスという騎士も馬を降りて彼女の足もとにひれ伏した。——この突発的事件を見た一同は驚愕した。だれも恋する対象をもたないと思われていたリジドールには、しばらく異国に行っていて、いま帰国した、リグダミスという愛するひとがあったことを知った。

だれの目もはばからず、ふたりが愛のことはを交わし合うのを見るリザンドルは、「箴言」ともいふべき詩句の形で内心の考えを述べる。⁽²¹⁾才知もなく、頭のそれほどよくない者でも、恋すればこそであるうが、これほどの美しい云いまわしのことばが述べられるのだ、という発見。そこには認識を新たにしようとおどろきがあり、Espiritのバロック的働きをとらえているのだというべきだろう。

しかしいっぽう、同時に、リジドールの情念のままに行動したありかたは批判されるべきものであった。Espiritがより策略的な才知・才気、頭のよさの側面だけでなく、判断し、了解し、推理する精神能力をも含めるとすれば、リジドールはひとびとの評価を最終的に動かしがたい形であかししてしまったのだ。周囲の状況や他人に与える効果を考えることさえできず、リグダミスとの愛人関係という秘密を、あまりにも赤裸にみずから暴露したという愚かさ、衆人環視のなかで男の頭を半時間ものあいだひざにのせつづけていたという遠慮のない愛情のやりとりが、自分を恋するいく人もの男の心にどれほど残酷な効果を与えたかと思いやれない鈍感さを、リジドールはさらけ出した。

「リジドール」から「アルトニール」へ

失恋の痛手を負ったリザンドルは、郊外のさびしい庭園にしりぞき、ほとんど眠れずに歎き悲しんだ翌朝、放心状態でその庭園のなかをさまよい歩いているときに、アルトニールに出会うという段取りになる。リザンドルが彼女とめぐり合うのは、せめて作者は運命の力もち

出してつじつまを合わせるよりほかない一つの偶然事ではあるが、アルトニールはリジドルにはないものに恵まれ、その意味では対立的な存在であるのを考えると、彼女はリザンドルの内的志向性が引きつけたものだといっても過言ではあるまい。

「彼女は美しく、感じやすく、かぎりなく才知にあふれている……」のであって、つまり *Esprit* の点でリジドルとアルトニールとは対立している。前者から後者への移行はこうして、内的必然性には欠けていないことがあかしされてくる。

しかし美質に恵まれたアルトニールではあるが、その初印象においてリザンドルの気持ち強くとらえたものなかには、きわめて個性的なものもあった。

「(こちらにやってきたひとは) 女性というものが持てるかぎりの、うるわしいプロポーションをもち、大儀そうで投げやりな顔つきで歩いているさまは彼の心を極度に魅惑した……」

アルトニールは自他ともに認める「怠け者 *Parasense*」だったのである。この個性的な部分と強くかかわるとき、リザンドルもまた女性観・好み・癖を通じてみずからの

個性を描き出される結果となる。——庭園のなかでふたりだけが接近し合うのを認めても、また、すれちがうときに彼女の落としたヴェールを男が拾っても、いっこうにたじろいだり、おどろいたり、きびしく非難したりしないのは、彼女の投げやりで怠惰な性格のせいだったが、リザンドルはかねてから、この種の性格の女性と出会うことを願っていた。

怠惰な女性は一切の面倒を避けようとするから、男性は神経質に、あるいはきびしく拒絶されることがないという好都合さに乗じてリザンドルは、相手の名と、数日で終わる仕事でこの街に滞在していることなどを相手から聞き出し、彼女の気を引くよう振る舞って、翌日からその宿舎を訪問することが許された。よく聞いてみると、アルトニールはリザンドルと同じ、有名なある街が出身地だった。——数日後の宴には花飾りに美しい詩句を添えて贈り、さまざまに心を砕いたので、アルトニールはこの街での日程を延ばしたほどだった。そして彼女が発するときには、彼は「相手から憎まれてはいないと信ずることができた」⁽²⁴⁾。

ふたりの交際は二週間だけだったが、リザンドルの懸

命な行動は、アルトニールの心に大きな進展をもたらしたことは疑えなかった。とにかく愛を感じれば、すぐに愛していると告白できる自由な風土であったし、また旅でもあった。加えて「怠け者」であるアルトニールが処罰的なきびしい仕打ちをするはずはなかった。

ここで注意を引きつけることは、リザンドルがその気持ちで *Perseverence* によつてではなく、*Empressment* によつて示した、という作者の記述である。信仰に関する語として出発している前者は、「堅く揺るがない気持ち」「耐え忍ぶ心」とも訳すべきであると思われ、後者は「性急さをともなう熱意」とでもいったらよいものだろう。もちろん時間的な制約のゆえに前者の形をとるのには不可能であるという弁明は成り立つが、いずれにしても宮廷男の策と演技は高度に意志的なものとすら感じられる程度にまで高まる。

リザンドルの演技はわかれの瞬間には、さすがの作者にも皮肉なことばを吐かせるほどのものとなる。一日の行程まで彼女を見送って行き、リザンドルは「天から受けた恵みのなかでも」最大の恵みである、必要な場合にはいつでも多量に流せる涙を見せながら最高の演技をす

るのである。

多大の才知と能力に恵まれた若い貴公子が、真の情熱家以上の情熱家に扮するのは、罰せられずにすむことだったか？ アルトニールの出発後、おそらく国王からであろう、ちょうど彼女が向かったのと同じ場所におもむく命令を向けたリザンドルは、文字どおり走ってその街に行き、熱心さを見せるためにほこりにまみれた旅姿のまま着がえもせず、教えられていた家に駆けつけた。しかしおどろいたことには、アルトニールはその家にはいないばかりか、そのような名の女性を知っている者もいなかった。

旅という、自由で無責任な空間が許すいづわりによつて、アルトニールはリザンドルを罰したかに見える。いや、才知の競争においてははるかにうわ手の彼女が勝ったのだといふべきかもしれない。一見すると愛の寛大さによつて——その底では傷つけられた自分を認めたがらない自己愛によつて、「たぶんあのひとは別の名を名づけているのだらう、ほんとうの名を自分に隠したのは理由があったることだ」⁽²⁶⁾と、リザンドルは信じようとする。

「アルトニール」から「ドリーズ」・「ク

ロリアーナ」へ

リザンドルがドリーズとクロリアーナのふたりにめぐり合うのは、アルトニールが指定した家をたずねた結果だった。アルトニールのことを突きとめようとして、とにかくこの家の貴婦人に会うことを求め、リザンドルの名は知られていたので、「世にもすばらしく飾りつけられ、このうえなく豪華な」アパルトマンに通される。そこに、伯母に養育されてきたいとこ同志の娘たち、ドリーズとクロリアーナがいて、その結果リザンドルは「運命に身をまかせようと決心する」。

しかし恋びとの喪失という心の空虚を慰めてくれる、これらふたりの新しい対象に向かう決心をするまでには、二週間以上の日数を必要とした。アルトニールにだまされたにもかかわらず、リザンドルが自分の心変わりや彼女の罪だといってみずからの良心に弁解するのを見ると、彼はアルトニールによってしんそ心を動かされたのかもしれない。が、このような心理は「失われた恋びと」が生じさせる過大な幻想でないともいい切れないの

である。

アルトニールからドリーズとクロリアーナへの移行には、またしても「運命の神」がひと役買ったが、ここには心理分析の観点から見て次元の上昇がある。ふたりの女性はそれぞれが美女であり、ひとりずつ登場させることも可能であったろうに、あえて作者はふたりを同時に読者の眼のまえに連れ出した。ふたりの女性が対立的であり、補完的である、そのあいだには含まれた場合、その二律背反的な心理は一挙に複雑化し、みごとに近代性を獲得する。小説の外見的な相だけにわざわざいされて、ヴィルデウ夫人の才能を過小評価することの危険性を、そのことはじゅうぶんに教えてくれる。

まず、ドリーズの肖像ポルトから紹介する必要がある。

「ドリーズと呼ばれる方は、誇り高く威厳があつて、恋愛感情と同時に尊敬の念をも引きおこす美人タイプのひとりだった。髪はブロンドで眼は青く、顔の線はすべて整っていた。そして自尊心の高い顔つきではあつたけれども、才知の面ではきわめつき(22)の穏やかさが、心情においては例のない親切さと、だれにも劣らない誠実さがあつた」

他方クロリアーナについては、どのように描かれているか。

「クロリアーナという名のもうひとりとは、反対に、世にも繊細で、このうえなくいたずらっぽいタイプの娘だった。髪は栗色で、その美しさは整っているというよりは、みずみずしく輝いているというべきだった。彼女はその眼と才知とに、愛嬌のある生気をたたえていた。もちろん非常に無垢であつたにもかかわらず、少しばかりあだっぽい顔つきをしていた」⁽³⁰⁾

つづいてクロリアーナと恋愛との関係が説明される。「もちろんその心は恋愛感情によって燃えあがるが、それ以上に彼女の才知はもっと容易に燃え立つらしいことがたやすく判断された。いっぽう彼女自身の魅力はどのような男でもその手から逃がられないほどで、彼女の示すより以上の魅惑を示した女性はかつてないといえ、彼女に接近する男たちすべての弱い心を完全にとらえてしまうという点で、いままでこれほど完全な存在はなかった」⁽³¹⁾

最後にドリーズとクロリアーナは対立的に描かれる。「彼女(クロリアーナ)の取り巻きグループは、それ

ゆえ数がふくれあがっていた。が、ドリーズの方の取り巻きは、より高尚な質をたもっていた。一方が柔軟な心を揺りうごかすとすれば、他方はほんとうの価値を感じる能力をもったひとたちを捉えた。ドリーズは情熱を永遠の約束とみなさないような恋びとは寄せつけなかった。そして、クロリアーナがより愛されるタイプの女性だといえるなら、ドリーズはさらにいっそう愛される女性だと、いうこともできるのだ」⁽³²⁾

リザンドルはいちおう以上の認識をえたうえで、これら優劣つけがたいふたりのうち、どちらを選ぶかの結論に達するが、それはつぎのような理由による。ドリーズはもっとも尊敬に価する女性ではあるけれども、クロリアーナの方が自分の心同様、その心を燃えあがらせることがたやすい。ドリーズを選んだ場合は重い恋愛情念を支えて行く覚悟が必要だが、自分はそれに向いていないし、恋愛を快いたのしみとしかみなすまいとの誓いもしているのだから、クロリアーナの方が自分の行きかたに適合している――

リザンドルの性向として、一度そのように決めたからは、秘密を長く胸にしまっておくことはできなかった。

ちようどふたりの女性が田舎に小旅行するというチャンスがあり、クロリアーナは彼に街に起こる新しいニュースを手紙で知らせてくれるよう頼んで出かけた。リザンドルはこの機会を利用して、街のニュースならぬ愛の告白を手紙にしてさし出した。それは詩の形になっていた。それがそのままクロリアーナの手もとに届き、リザンドルとのあいだが進展したならば、作品はきわめて単純な物語りとして終わることだろう。ところが、手紙は誤まって届けられてしまうのである。

手紙の誤配事件

ヴィルディウ夫人自身の『恋愛日物語り』にも、またラ・ファイエット夫人の『クレージュの奥方』にも、「手紙類紛失・拾得(横領)事件」が起こり、それらがパロック性の強い偶発的事件であるとの印象はいなめないにもかかわらず、作品のロマネスク性に寄与するのはもちろんのこと、人間心理の展開についても重要なバネになることは認めなければなるまい。「心理の実験室」における実験装置としての存在理由を認めるなら、それは重要な因子となるし、とりわけこの作品ではその事件

がなかったなら、二次式化した心理分析はおこなわれずに終わったことだろう。

リザンドルの手紙を託された少年が、クロリアーナを以前見たことがなかったために、リザンドルの資格から想像してクロリアーナはもっとも美しいひとにちがいないと考え、ドリーズに手紙をわたしたことが、複雑な心理的かつとうの発端となった。

ドリーズは大声で手紙を読みあげる(自分とは恋愛関係のない男性からの手紙は、そうする習慣があった)。

愛の告白である内容に赤面し、どきまぎする。クロリアーナはかねて手紙を頼んであったので、これは自分宛てだと信じ、恐れないで、あなた宛てじゃないんだから——といいつつ、その手紙を奪いとる。

あなたの恋を羨んでいるのじゃない、あなたの思いがいたといけないから、確かめるべきだといっているのよ、とドリーズは叫んで、クロリアーナから手紙を奪いかえす。こうして手紙の争奪戦が始まった。

使いの少年はおどろき、もし真相を明らかにしたら取り返しがつかなくなると恐れて、宛て名人を聞かれても、忘れた、とシラを切った。それは彼女らの好奇心をいっ

そうかき立てた。少年は急を告げに走って帰ったが、主人はすでにいず、このころすでに街に返りついたクロロリーヌに会いに行ったのだった。

リザンドルはクロロリーヌには会えず、先きにドリーズに面会した。彼女は例の手紙を示して相手を難詰したが、彼は自分が出したものではないといったので、ドリーズはゆるした。しかしちようどそのときクロロリーヌが入室してきて、その手紙を見、ドリーズにこれがわたし宛てであるのがわかったでしょう、という。

ふたりの論争をまえにして、リザンドルの当惑と混乱は深まった。

「クロロリーヌを眺めると、彼はもう少しで真実を口にしそうになるのだ、が、ドリーズに視線を投げると、彼女があまりに美しいので、相手とのあいだの友情をこれきりにする決心がつかなかった。³³……」との心理を出发点として、リザンドルの二律背反的な、一種のアンビヴァレンツな心の動きは白熱し、高潮して行く。この日以来彼は両者に等分に仕え、いづれをより愛しているか判断できないように振る舞うほかはない。

そして愛される女性側も、心理分析的に差異が認めら

れる。つまりクロロリーヌはより感情が開放的であり、生来的に愛されることに大きな喜びを感じるタイプであり、甘えや媚態も呈する女性である。彼女がリザンドルに愛される対象であるよう願うのは、ライヴァルを第一義的に意識するからそうなるのではない。それに反して、ドリーズはけっして単純に理論的と決めつけてはならないが、ひどく抑制的であり、美人特有のある嫉妬心もち、クロロリーヌの自尊心を少しはくじいてやりたいとの気持ちから、リザンドルの心を動かすためにはなんでもするし、結局は彼に、自分に対する愛の告白をさせたかったのである。

こうして、このふたりから愛されるという過度の幸福はリザンドルをますます当惑させ、これ以上みじめなこととはないほどだった。ふたり一緒にいるのを見ると、リザンドルはクロロリーヌの稀れなみずみずしさがまさるのを感じ、ひとりひとりをべつべつに見ると、ドリーズのすぐれた資質が彼を完全にとらえるのだが、この不決断の苦しさに終止符を打つためにも、一方だけを愛するよう決めねばならないと思いつめる。

いよいよ最後の場面がやってくる。郊外の見晴らしの

よい家での食事に、彼はふたりを含めた数人の貴婦人を招待した。ふたりはいずれも、きょうこそリザンドルから愛の告白を受けるのだと信じた。その朝クロリアーナは彼から花束とマドリガルとを受けとって、誇らかにドリーズに見せたが、後者は単純な贈りものでは判断できないと否定した。機会をとらえてリザンドルとトランプで賭けをし、彼女もまた詩句を彼に贈らせた(賭けに勝って、負債を詩で支払させた)。

一同はリザンドルの招待した家に行ったが、ふたりの期待を増大させたり、打ちこわしたりの行為があまりにくり返されたので、彼女らは悲しみに沈み、グループから離れてさまよう。ついに、より慎重で、愛の感受性の鋭さに欠ける方のドリーズが提案、リザンドルの真の心を知るために、たがいに彼から与えられた証拠を打ち明け合って判断しようとし始める。ところがリザンドルが自分に与えた証拠は他に与えたものより強いと信じ込んでいたので、争いのきつさはますます鋭くなって行った。

「ドリーズ」・「クロリアーナ」から「アルトニール」へ

果てしてもない論争になることを避けようとして、ふたりは近くを散歩ちゅうの未知の美しい女性に判事の役を頼み込んだ。ところがおどろいたことには、クロリアーナが贈られたマドリガルも、ドリーズがもらった詩句もその女性を知っていて、最初の一行を聞いただけで最後まで暗誦してみせ、ふたりは呆然とする。これらの詩句は自分にこそ贈られたものだと、その未知の女性——アルトニールは断言してふたりの心を打ち砕いた。

リザンドルはふたりをやっと見つけて喜びながら近づいてきたが、そこにアルトニール(によく似た女性)がいるのを見て三步あらずさりした……

アルトニールの出現は、心理分析的な構造とは外見적으로는異質なものといえる。作者はこの作品をほどよい短かさで終えるために、また、浮薄な魂をもつリザンドルが処罰されるという教訓を打ち出すために、アルトニールをふたたび読者の視界内に帰り咲かせたのだ——といえどもっともよく事情が説明されるだろうか? とにかくドリーズとクロリアーナとはリザンドルを非難して退き(処罰)、彼はこの不意打ちの事件になすすべもなく立ちつくしてしまふ。

が、作者の恣意も内部構造的に全く非論理なものではない。つまり、リザンドルにはリザンドルの云い分があった。——アルトニールへの愛があればこそ起こった今度の事件であるのだし、また以前アルトニールに贈ったのと同じ詩句をふたりの女性に与えたのは、ふたたび会えるとの希望を絶ってしまった彼女の方にこそ責任があるのだ、とリザンドルはいいたげであった。だからアルトニールこそが自分を、この苦境から救い出してくれるはずだと信ずるのも、当然といえは当然であろう。

翌日彼女の家に出かけたリザンドルは、永久に期待が失われたことを思いしらされる。推量するところ、アルトニールは王家の血すじに近い女性であるらしく、さすがのリザンドルもその恋愛情念を、尊敬と賛嘆の情にとどめておくよりしかたがなかったようである。……

以上のように見てくると、リザンドルの三つの恋愛（四つともいえる）は、すべて失恋に終わり、モラル的には、恋愛情念をもてあそぶ宮廷男の「処罰の小説」であるところの作品を命名することもできる。しかし目的にたとえ倫理的な意図があっても（あるいはその意図を装って）、中途でなされる分析の成果は、なにかも価値

を減ずるものではない。

であるから、『リザンドル』のような *Nouvelle galante* ないしは *Petit roman précieux* の真の価値を検するためには、その外部的作品構造——つまり作者の恣意と偶然性、恋愛と事件のパロディ的喜劇性、さらには倫理家意識による教訓性のヴェールの内側にあるものを、目をこらして見る必要がある。リジドールとアルトニールとのあいだには一次式的対立が見られるが、アルトニールとドリーズ——クロリアヌとのあいだには、一次式が二次式にらせんの高まる軌跡が見られ、ドリーズとクロリアヌのあいだで、心理分析は二律背反的な、アンビヴァレンツな近代性を獲得するのを見おとしはならないのである。だから、ヴィルディウ夫人はラ・ファイエット夫人よりも遅れていると断定的にいふべきではなく、それどころか私にいわせれば、彼女はある意味では十八世紀（マリヴォーラ）・十九世紀（コンスタン、スタンダールなど）の心理小説・心理劇の、実験性・複合性を志向しているのである。

(一) René Godenne: *Histoire de la Nouvelle Française aux XVII^e et XVIII^e siècles*, Droz, Genève, 1970, p. 62

- (2) 『恋愛日物語』と『シレーウの奥方』 一橋論叢 昭和五十二年八月号論説
- (3) ただし発行所は異なる。『ギンバシエ公爵夫人』は Thomas Jolly 書店で、『リキアンル』は Claude Barbin 書店である。ギンバシエ夫人は『アンマサット』からジバンシエ書店発行であった。
- (4) A SON/AITESSE ROYALE/MADemoiselle
- (5) M^{me} de Lafayette: Romans et Nouvelles, Editions Garniers Freres, 1961; p 3 以下同様。
- (6) Œuvres de Madame de Villedeu, P. Gandonin, 1741; V. Les Amours des grands hommes, et Lisandre, nouvelle; pp 449-450 (以後 Œuvres へ發す)
- (7) Ibid., p 450
- (8) Vital d'Audiguier: Histoire tragi-comique de Ly-sandre et de Caliste; Dorothy Frances Dallas: Le Roman français de 1660 à 1680, Slatkine, 1977, Réimpression de l'édition de Paris, 1932; p 174
- (9) Ch.-L. Livet: Précieux et Précieuses, Quatrième édition, H. Welter, 1895; p 11
- (10) Comte d'Haussonville: M^{me} de La Fayette, Quatrième édition, Librairie Hachette, 1919; p 54
- (11) とはじつてつめ時代と距離を遠くへだたした私たちに、その具体的なモデルを考証することは不可能に近い。フランス人の研究者でさえ、それには手がつけられないようである。
- ④° Anatole Gallier: Madame de Villedeu, Librairie Rouquette, 1883; p 25
- (12) Œuvres; pp 449-450
- (13) S. Clogenson: M^{me} de Villedeu; Extrait de l'Athe-nam Français des 2, 16 juillet et 6 août 1853, Alençon, 1853; pp 12-15
- ロン公爵夫人と夫のシヤボキと、愛人のリェウイニエの三角関係をモデルとしたため、同夫人側がヴルイディウ夫人の原稿を印刷所におさえに行ったり、大法官セギエに名譽毀損の程度を判断してもらうなど、大きな騒動となった。
- (14) Œuvres; p 451
- (15) Ibid., p 450
- (16) (一)不安定性 (二)運動性 (三)交身性 (四)裝飾性。——『心理分析とはなにか』一橋論叢 昭和四十九年三月号 論説 参照。
- (17) Œuvres; p 452
- (18) Romans et Nouvelles, op. cit., p 248
- (19) (20) Œuvres; p 452
- (21) Ibid., p 455
- (22) Ibid., pp 465-466
- (23) Ibid., p 460
- (24) Ibid., p 464
- (25) Ibid., p 465

(51) 『リザンドル』論

- (26) (27) Ibid., p 466
- (28) Ibid., p 468
- (29) (30) (31) Ibid., pp 468-469

- (32) Ibid., pp 469-470
- (33) Ibid., p 476

(一橋大学講師)